

のら 運動か 現場 運現

焼津流平和の作り方

加藤 一夫

●ビキニ事件と焼津…封印と忘却と

静岡県焼津市は、東京と名古屋の中間にある人口14万ほどの水産都市である。「ビキニ事件」の町としても知られている。1954年3月アメリカが太平洋のマーシャル諸島で核実験を行い、焼津漁港所属の第五福竜丸と23人の乗組員が被曝した事件である。

被曝したのは第五福竜丸だけではない。水爆実験は広範囲に太平洋を汚染させ、漁船だけはなく、貨物船、捕鯨船、外国籍の船を含めて100隻以上が被曝したが、その実態はまだ十分に分かっていない。当時の政府は、対米従属関係を重視し（現在もそうだが）、事件を封印し、真相の大部分は闇に隠されてしまった。そして多くの事実が忘れ去られた。ビキニ事件は平和運動の出発点となったことでも知られている。第五福竜丸被曝の衝撃から東京杉並の母親たちが署名活動を開始し、またたくまに全国に、そして世界に広まり、翌年、広島で原水爆禁止世界大会を実現させた。大会は現在まで続いている。（焼津市でも合併前の大井川地区・吉水村で「村民の声」署名活動が行われた）。

しかし、その後、冷戦期の東西対立が運動

に影響し、平和団体の原水協は分裂し、一緒に活動した時期もあったが再分裂して現在に至っている。分裂が決定的になった場所も焼津であった。1964年の3・1ビキニデーで原水協と原水禁が衝突し、町の市民団体はすべて身を引いた。そのトラウマは今も続いており、市民の多くは無関心を装っている。

●新しい市民運動の模索

このような状況を打開しようとして始まったのが私たちの運動である。1992年首都圏から焼津市に移り住んだ私は、10年後の2001年に市民講座「やいづ平和学」を開き、地元の静岡福祉大学や公民館、港の集会場などを使って勉強会を行った。現在まで70回になるが、その受講生メンバーから1993年に市民活動が提案されて「ビキニ市民ネット焼津」が生まれた。最初は1994年のビキニ事件50年に対応した活動だった。既存の政党や政治団体とは距離を置き、個人資格で参加し、出入り自由が特徴である。地元の『静岡新聞』も後押ししてくれた。最初は、まだ生存している当時の乗組員や関係者たちの聞き取りが中心だった。その後、運動の方向をナガサキやヒロシマと結び

つけていった。徹底して地域を掘り下げる運動にこだわり、3月、8月、11月に大きなイベントを地元で組織し、焼津市主催の地域イベントである春の港祭りや秋のオータムフェストに毎年参加した。そして第五福竜丸という平和ブランドを活用する町おこしを他の団体とともに始めた。私たちはこれを「焼津流平和の作り方」と名づけた。

とり壊された内港（旧港）の跡地や近くの集会場を拠点にして音楽会、ライブ、アート展、講演会、映画会、原爆・原発写真展などを行なってきた。行政に対しては、焼津平和賞を提唱した。2008年12月の焼津市長選に際して出したもので、戦後初めて無所属・市民派の市長を選ばせた。メンバーから県議員や市議員も生まれた。中央で政権交代が実現したのは、翌年の9月である。

●3・11の衝撃と脱原発運動

2011年3月の大地震・津波と原発事故は、半世紀以上にわたったビキニ事件の封印を解いた。原発事故は、ビキニ事件の見直しを要求することになった。多くの問題があるが、ここでは次の2点を挙げる。

第一に第五福竜丸事件の新たな立ち位置の問題である。これまでは第五福竜丸と乗組員は核被害者として位置づけられた。しかし、地域では加害者である。マグロパニックが起こり、風評被害により、地域の水産加工業が致命的な損害を受けたからである。また、ア

メリカ政府が提示した見舞金や補償金により、魚の町は分断され、差別も発生した。しかし、当時の平和運動は、こうした地域の崩壊や分断・差別に注目しなかった。地域の被曝状況やその影響にも注意を向けなかった。ヒバクシャのみに焦点を当てた運動だった。この問題は、フクシマの今後起こりうる地域分断・差別につながっている。

第二に、封印された事件の裏で原子力の平和利用が進められ、原発によるエネルギー開発がこの事件を機に始まった（潜在的な核武装を準備することでもあった）。1954年3月、ビキニ事件発生の翌日に原子力開発に関する中曽根予算が可決され、以後、70年代からは原発3法などで交付金による地域開発が進められ原発は国策となり、現在まで54基が日本列島に作られた。ビキニ事件はその踏み台となった。その意味でビキニ事件は3・11フクシマの原点の位置にある。

焼津市は、東海地震震源地の真上にある浜岡原発から30キロ圏内にある。私たちのグループには環境派メンバーが多く以前から原発には関心を持っていた。2011年7月に「くろしおネットはまおか」が結成され、私たちのメンバーの一部もそれに参加した。そして全国的な反・脱原発のうねりのなかで、さまざまな活動を行ってきた。東京での集会・デモ、静岡市でのパレード（デモ）や、脱原発運動に関する講演会や勉強会、放射線講演会、写真展、有機農家グループとの交流など、

その輪は拡大しつつある。

昨年7月には静岡県では市民による原発県民投票が提起され、私自身も何人かの県会議員の説得にあたったが、結局、10月に県議会が否決されてしまった。

「ビキニ市民ネットワーク焼津」の活動も、いまだ地域の様々な運動に溶け込み一緒になってもやっているとため運動の境界線が曖昧になっているが、2014年のビキニ事件60年を目指して「60年プロジェクト」を昨年8月から始めている。

昨年12月16日の衆議院選挙は、自民党の圧勝で終わった。焼津市でも11月の市長選挙で市民派市長が大敗し、また自民党の市長が生まれた。

なぜ反・原発運動が選挙結果に結びつかなかったのか。歴史を逆戻りさせる政府に対抗するには対抗勢力の緩やかな結集が大切な

の 運動から 現場 福島の女たちに感銘を与えた 「グリーンナムの女たち」

2013年1月6日（日）経産省前の女テントでシネマデテントが開催された。（女テントは建てられた順番から「第二テント」と呼ばれていることが多いが、私はボーボワールの「第二の性」を連想するのであってそれは使わず、「女たちのテ

だが、どうも左側の人びとは、「正しい運動」に固執していて自己反省が弱い。いまだ冷戦イデオロギーも残っていて、リベラルを含む大同団結の戦略がない。原発反対運動も、単に反対するだけでは地域では弱い。私たちの周辺では中部電力の原発で働いている人や、下請け労働者、設備・部品の企業関係者も多い。具体的に持続可能なエネルギー供給の方向性を提示しないと説得力がない。地域生活圏の運動は、首都圏の活動とはかなり性格が違うということを指摘しておきたい。

（かとう・かずお／ビキニ市民ネットワーク焼津代表）

この間の運動については、『焼津流平和の作り方「ビキニ事件50年」をこえて』（2007年）、『ヒロシマ・ナガサキ・ビキニをむすぶ 焼津流平和の作り方』（2012年）、いずれも社会評論社。また、その間の私自身の総括は『やいづ平和学入門 ビキニ事件と第五福竜丸』（2012年）論創社にまとめている。

黒田 節子

ント」と言っている。さて、今回の映画は「グリーンナムの女たち」だ。グリーンナムへも実際に向き、この映画を日本に紹介した近藤和子さんとは20年以上も前に出会っていて、この3・11を機に再会していろいろとお世話に